

# 鹿児島県現代俳句協会会報

第 42 号  
2019・5月

発行人 高岡 修  
編集人 園田 千秋  
事務局 鹿児島市郡山町  
〒891-1105  
Tel 〇九五 二九八 四八〇

印刷所 有限会社アート印刷

## 一句の誕生

磯辺 正悟

なぜ私は、人間としてこの世に生まれて来たのか。なぜ日本人として生まれたのか。どうして女ではなく、男として誕生したのか。どうして長男ではなく、次男として生を受けたのか。なぜ今まで死ぬことなく、生きていくのか。

これらの回答は、科学では究極的に説明できない。しかし、私が長年親しんで来た仏教では、因果の道理として、過去世の善悪の行為（引業・満業）によって、現在の運命が定まると教えている。このような哲学的な疑問は、青臭い議論だと言われそうだが、大変重要な問題である。

無謀かも知れないが、これを俳句について当て嵌めてみよう。つまり、この「一句」はなぜ生まれて来たのか。

俳句は、人間が拵えるものである。今は AI（人工知能）も俳句を作るそうだが、独立出来ないから、擬似俳句と言っている

だろう。そして人間には、様々なタイプがある。内向型・外向型、観念的や現実的、保守的・革新的、オプティミストやペシミスト、スティック・スノップ等々。これらの人々は、保守的な人は伝統俳句へ、堅実な人は有季定型、観念的な人は心象俳句、制約を好まない人は無季や自由律へ、それぞれの流派に吸収される（大体です）。各自の外界との関わり方が原因となって、そのまま個性に反映される。どうしてかと言うと、自分の意に添わない俳句を作り続けるのは苦痛だし、そもそも宿業が許さないと。

もっと掘り下げてみよう。先程私は因果の道理と述べたが、別の言い方をすれば縁起という事である。ある事物が生起するには、原因だけでは成立せず、様々な条件（縁）を待って顕現する。例えば一個のシャボン玉が生まれるまでは、原因である石鹼水が

用意され、条件としてストローやコップ、吹く人間、大気の状態が揃って初めて、空中に一個のシャボン玉が躍り出てくる。

一句もそうである。俳句は人間が作るものであるから、作者の業力が原因になる。その一句がどういう様式を選び、どのような表現を取り、どんな作風になるかは、大方はここで決定する。その業力は種子として、阿頼耶識に蓄えられる。また一句の縁としては、先祖や父母の存在、日本という国、俳句という文学があった、俳句と巡り逢う環境などである。やがて機が熟すと、それぞれの因と縁が和合して、一句が開花するので。

人間が存在しなければ、「一句」は誕生しない。猫は俳句を作らないし、マネキン人形が一句を詠むことはない。人間と俳句はまさに、運命共同体と言っているのだ。そして今、つくづく思うことがある。「人身受け難し、今己に受く」と。俳句と出逢ったことは「有り難い」と。

# 平成31年 鹿児島県現代俳句協会総会

日時 平成31年2月17日(日) 11時～

場所 パレスイン鹿児島

1. 開会のことば 園田 千秋
2. 会長挨拶 高岡 修
3. 議長選出 山下 久代
4. 協議事項 ア 平成30年度事業経過報告  
イ 平成30年度会計報告および監査報告  
ウ 平成31年度事業計画ならびに平成31年度予算案審議  
エ その他

## ア 平成29年度事業報告

- (1) 定期総会ならびに新年俳句大会 平成30年2月18日(日) パレスイン鹿児島  
11時 役員会  
13時 総会・俳句大会 66句投句  
大会賞《ピラカンサ極寒の日の接続詞 山之内まつ子》  
16時30分 懇親会 13名参加
- (2) 平成30年度 第二十七回藤後左右忌俳句大会  
104句投句 平成30年6月24日 レインボー桜島  
大会賞《月下美人火星に近き夜を開く 小川 莎良》
- (3) 平成30年度 篠原鳳作忌俳句大会  
108句投句 平成29年9月30日(日) 紙上俳句会  
大会賞《妹は花野の鍵を失くしけり 秋山 青松》
- (4) 鹿児島県現代俳句協会会報 第41号発行 平成30年5月

## イ 平成30年度会計報告および会計監査報告

## ウ 平成31年度事業計画ならびに予算案審議

- (1) 平成31年度定期総会ならびに新年俳句大会 平成31年2月17日 パレスイン鹿児島
- (2) 平成31年度第二十八回藤後左右忌俳句大会 平成31年6月16日 レインボー桜島
- (3) 平成31年度篠原鳳作忌俳句大会 平成31年9月29日 フラワーパークかごしま
- (4) 鹿児島県現代俳句協会会報 第42号発行

## エ その他

- (1) 役員改選(任期2年)  
《平成30年度役員》会長 高岡 修 副会長 松下けん  
事務局長・会計 園田千秋 (会計補佐 下原培子・愛甲敬子)  
理事 愛甲敬子・磯辺正吾・假屋園いく子・下原培子  
細田慶子・末永一雄・橋口 等・山下久代  
監事 宇都宮華水・假屋園いく子
- (2) 第12回九州地区現代俳句大会 in 鹿児島(2019年11月30日)(事務局 山下久代)
- (3) 鳳作忌では昨年度同様、バスをチャーターしたいと思います。詳細は案内葉書で。
- (4) 協会報原稿 平成30年度の作品より《今年の2句》募集
- (5) 会費納入振込先(取扱銀行)鹿児島銀行星ヶ峯支店(口座番号)227070  
(口座名)鹿児島県現代俳句協会 会計 園田千秋

平成三十年度  
鹿児島県現代俳句協会

新春俳句大会

平成三十年二月十八日

パレスイン鹿児島

投句数 六十六句

大会賞

ピラカンサ極寒の日の接続詞

山之内まつ子

優秀賞

齡殖ゆすずなすずしろ溶けだして

下原 培子

きさらぎの鳥きさらぎの光啞え

高岡 修

少年は初蝶の舌隠しもつ

末吉 優子

鳥籠に紙飛行機の卵ひとつ

磯辺 正悟

平成を古文漢文梅の花

山下 久代

月光の窓辺を溺れているワタシ

宇都宮華水

母の匂いの蕎麦屋にはいる蝸牛

暉峻 康瑞

世の闇へ豆打つ子らよせつべとべ

春田理恵子

平成三十年度  
第二十七回

藤後左右忌俳句大会

平成三十年六月二十四日

レインボー桜島

投句数 一〇四句

藤後左右賞(大会賞)

月下美人火星に近き夜を開く

小川 莎良

鹿児島県現代俳句協会賞

わが影はどこから来たのか夏の天

鮫島 洋子

鹿児島県俳人協会賞

風ぐるまピリオド打てぬ進化論

耳成 保一

南日本新聞社賞

闇壺に落ちて睡魔となる五月雨

宇都宮華水

優秀賞

魂を脱ぐように咲き白蓮

細田 慶子

金魚いて会話も溺死の喫茶店

山之内まつ子

時の日ぞ右脳左脳の螺子を捲く

春田理恵子

菜の花列車一番星より帰還せよ

橋口 等

白南風や濤に預けし砂の文字

坂元 良子

朴の花白磁の匙で掬う空

堀口 良子

紫陽花がばくはつしたという噂

徳森 涼子

平成三十年度

篠原鳳作忌俳句大会

平成三十年九月三十日

フラワーパークかごしま

投句数 一〇八句

篠原鳳作賞(大会賞)

妹は花野の鍵を失くしけり

秋山 青松

鹿児島県現代俳句協会賞

少女とは満身に咲く白竜胆

末吉 優子

鹿児島県俳人協会賞

赤とんぼ風の端っこつかまえる

小屋敷ちあき

南日本新聞社賞

真珠貝月光青く身籠りぬ

小川 莎良

指宿市長賞

17の青い言葉を肺で咬む

山口 維心

優秀賞

曲がり角またまちがえて秋に立つ

藤原 壽子

海が来て私を洗う鳳作忌

南園 美基

水やりの少女の手より虹立てり

山下 裕子

あれは明日へ落ちる完熟の月

堀口 良子

かつて露が月のしずくでありし時

前田 霧人

~~~~~

### 句集紹介

徳森涼子句集「遠い目で咲く」

二〇一八年四月 ジャプラン刊

3・11へ遠い目で咲く白つばき

稲元幽林句集「夢の指紋」

二〇一八年七月 ジャプラン刊

化石にも夢の指紋はあるかしら

細田慶子句集「七分の嘘」

二〇一八年九月 ジャプラン刊

ソーダ水今日は七分の嘘が合う

橋口 等句集「建立 橋口等全句集」

風詠社刊

宇宙巡礼星星をして祈らしめ

### 諸家近詠 今年之二句 (平成三十年)

愛甲 敬子

新緑のサラダお代わり自由です

あの事は切り出せぬまま遠花火

秋山 青松

真夜中に感性の林檎をみがく

妹が水やる庭の不眠の木

磯辺 正悟

鳥籠に紙飛行機の卵ひとつ

蜥蜴さん言葉の病院どこですか

市川 陽子

薔薇百本たった一本だけ本心

この愛は古代紫ぬりたくれ

稲元 幽林

海霧やゆうべ見た夢そこかしこ

ことのはの和紙に漉きこむ春一番

上之原 杏

青空を招くりビング春の歌

如月を彷徨う記憶に雪明かり

浮津 智子

万年筆春のインクに替えて書く

早朝の白リンドウの一人言

宇都宮華水

青春の柩の中の蜃気楼

帰り来よ海に落暉の架けたる橋を

海老原 静

サバ缶を開ける家族が春になる

栗きんとん白寿の私を囲み笑む

大田府二子

麦藁帽穴の開くほど奉仕して

鋏振るう後ろに秋が立っていた

国生 まや

魔の森のジャンヌ・ダルクに道を訊く

今日の秘密持ち去る鍵穴の夕陽

岡村知鶴子

哲学は知らぬ存ぜぬ冬の月

青春の記憶を泳ぐいわし雲

假屋園いく子

落花とは空裂く力花の乱

青嵐ゆびの一点から始まった

久保うめ子

ドングリだ青いミニトマト孫の手に

快晴の下 客乗せ走るそらバスよ

桑鶴 翔作

トーストに朝焼けのジャムを沈める

ローカル線とセイタカアワダチの引き際

桑原 道子

啓蟄の虫に倣って出かけよう

若葉風浴びて少女になりすます

小屋敷ちあき

振り向いたあなたのひとみ青葉色

秋の夜十七音のかくれんぼ

細田 慶子

土筆摘む指饒舌にして、私  
虫にはなれない私ほたる飼う

杉山 武子

ふらここに魂のせこぐや幼な子は  
彼岸花亡き母父に逢えたかな

徳山 和子

シクラメンかこみて笑う亡夫の顔  
亡き夫に春の彼岸にちらし寿司

桜井 光風

出棺に薄くおそらく春の雪  
梅雨の明け青く鋭きものひかる

鈴木あづみ

純愛がザクロの花になる正午  
悪の実が熟して言葉を締め付ける

富吉 睦美

「あの場所で」耳打つように花吹雪  
くちなしの魂だけをさしあげる

佐野ふみ子

仔を抱く瘦せし乳房やよごれ猫  
若い目の夫と紛うや息のうなじ

園田 千秋

さざめきや魔法使いのさくら貝  
AIしてゐるなど戯れ言をながれ星

西野 康子

棘ひかる凶鑑のような恋を待つ  
拾つてはダメ秋天と自分史と

鮫島 洋子

紙風船憂さ吹き入れて初夏の空  
我が影はどこから来たか夏の天

高岡 修

駅裏でまた転生へ夕焼ける  
夕焼けの腸豹につめ剥製師

新田 久雄

惑星にひと枝借りる女郎蜘蛛  
ペンシルの芯折れただけ秋ごころ

下原 培子

齢殖ゆすずなすずしる浴けだして  
花茨 耕し耕しひとの逝く

田原ますみ

日常がふつうに動く三日かな  
百日紅つかんだ夢をとり落とす

橋口 等

鴉の贅天上無風天下無人  
核の冬人工衛星のみあかし

新宅 和正

夏の海 母の苦しみ天の川  
彼岸花いにしえ想い秋目浦

中馬 雪弥

雪だるま春の光に首かしげ  
父の日の天空に贈るバラ一輪

橋口美代子

飲みほしてみればわかるわ薔薇の素性  
もつと奇麗に生まれたかったツクシとワタシ

末永 一雄

辞書を翔つ晩学の一語夏来る  
旧友のふと目をそらす古着市

暉峻 康瑞

母の匂いの蕎麦屋へはいる蝸牛  
木の国の木の寺に生まれ満月です

原之園厚子

頬撫でるひとひらの雪母恋し  
月の夜の砂地に映る時の息

末吉 優子

少年は初蝶の舌隠し持つ  
少女とは満身に咲く白竜胆

徳森 涼子

湖に眉書きにくる織月  
秋蝶が花占いをしています

春田理恵子

恋みくじ引いてみようよ花の兄  
私だつて私だつて血を噴く藪椿

春田眞末子

春の夢メロンパンひとつくください  
寒明けやまあるいたまごいかがでしょう

樋渡 能定

ちちははにつまもない目に白い月  
駅舎木造乗客一人単線路

藤原 壽子

曲り角またまちがえて秋に立つ  
万緑を切り裂く鉄路空に吸われ

北郷 萌祥

俳クツク言の葉ざざみソースでひねる  
彼岸花 母をむかえてさかりなり

堀口 良子

鳥籠を誰かが開けて春の空  
裏を読め明る過ぎるぞ向日葵は

本田万里子

万象の鼓動きこゆる梅一輪  
星流る無限の果てに父母在す

前田 霧人

初雪やあしたはいつも新しい  
二枚舌三枚にしてにぎり酒

松下 けん

原点は新樹 初日を仰ぎながら  
よーそろー兜太乗り込む花筏

南園 美基

ノートの暗闇 ことばの裸身光る  
秋の夜 美しい血を使い果たして

耳成 保一

真白へと呼吸も化粧す梅明かり  
秋愁やへっぴりバーンを素描して

宮永 武彦

浜昼顔囁く夜に落とす針  
夕凧で駆け出す少女の鼓動の海

百瀬 光里

若者と橋ゆずり合う螢がり  
エメラルドのような蛹はブローチに

森 賜代

御社に脚引きぎずって秋の蝶  
木屋町の川に流れる黄落葉

柳田富美子

菜をきざむ両手のシワが愛しくて  
風鈴の音聞きたくて吹いてみる

山口 維心

ヒナゲシのうなじに染まる君だった  
思春期の水面にもがくチョウトンボ

山崎 鶴恵

見上げいて一つ留守です冬北斗  
大氷柱月も戦車も呑み込んで

山下 章江

こでまりはわらべとあそびつかれがお  
今年こそ雑に咲きたいグラジオラス

山下 久代

死のたまご雲の巣箱にあたたためて  
寒椿 心の影を踏みに来い

山田 良子

玄関に夫が活ける百合の花  
台風の進路図見つめ老夫婦

山之内まつ子

如月に麻醉かけられ死にましよう  
さるすべり仮死のサプリを下さいな

吉本 知代

七草に混ぜて呑み込む己が闇  
初日の出大海原に一本の道

和田 優子

キスされた春は春色私色  
立葵後ろめたさもありません

若杉 凜

夕立に覚醒される内なる芽  
にらの花弾ける夢に文を書く

~~~~~

列島春秋（地区別現代俳句歳時記）

- 一月号 細田 慶子  
天使にも不浄の刻があつて雪
- 二月号 園田 千秋  
天界の夢のしたたり落椿
- 三月号 高岡 修  
死者の胸の春愁を翔つ水の蝶
- 四月号 磯辺 正悟  
陽炎をホテルと思う木馬かな
- 五月号 肥後 洋子  
囀りの右脳左脳や明易し
- 六月号 本田万里子  
結界を越えて二人は蛍です
- 七月号 古川 満代  
綾取りの梯子のぼれば夏銀河
- 八月号 末永 一雄  
住所録消す線にある秋思
- 九月号 樋渡 能定  
県道沿い独居三棟秋真昼
- 十月号 末吉 優子  
火の指を以て月光解きほぐす
- 十一月号 池田 太恒  
唇の愛は人の世冬薔薇
- 十二月号 橋口 等  
宇宙巡礼天狼星に導かれ

『現代俳句年鑑二〇一八』を読む  
牧 ひろし選 感銘十句抄

夏薊少女の中の発火点

末吉 優子

山本鬼之介選 感銘十句抄

天上の子の手をさがすゴム風船

高岡 修

佐藤 鈴子選 感銘十句抄

煎じつめれば赤子になつて黄泉へゆく

暉峻 康瑞

野口 京子選 感銘十句抄

鯛雲みんな集まれ母が逝く

本田万里子

感銘の一句

動悸てふ韻律のあり夏の月

第九回 現代俳句の風より

枯芝を駆けるそのうち無重力  
組板は母の打楽器春隣

愛甲 敬子

風どつと大白鳥を烟らせる  
春夕焼どこに触れても水匂ふ

末吉 優子

万羽鶴人体損傷いづこもなし

橋口 等

桜さくら数多の貌と巡りあう

下原 培子

第十回 現代俳句の風より

祈る手の足りぬ八月千手欲し  
行ききりし女の果ての吾亦紅  
焼芋を割れば擦り寄る昭和かな

愛甲 敬子

黙禱の子らの繋げる八月よ  
秋夕焼見知らぬ人と声挙げる

下原 培子

編集後記

◇今年もまた天候異変がありそうです。  
五月というのに北海道では39度も気温を記録しました。協会報の発行も遅れましたが、これは、天候異変のせいではありません。私の怠慢のせいです。ようやく協会報42号をお届けできます。◇当協会の会費（年額三千円）の納入も、是非ご協力くださいますようお願い致します。P2の総会の資料の末尾に振込先を記してありますので、協会費の未納の方は振込のほどよろしく願います。  
（園田千秋）